



10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

現在の生育状況

(1) 苗の生育

- ① 7月は、降雨が少なく（図1）、日照時間は平年並みで推移しました。このため、7月には、根傷みが少なく、順調に生育しているところが多かったが、一部、水持ちがよいポット培土を使用しているところでは、根傷みが見られました。
- ② 8月11日から大雨により、苗が浸冠水したところがありました。また、8月16日以降に心葉に脱水症状による葉先枯れが広範囲に発生しました。
- ③ 株冷入庫前の苗の体内窒素濃度にばらつきが見られます。

(2) 病害虫

炭そ病の発病は、7月中旬から拡大し、一部では多発している生産者もあります。

8月半ば以降、輪斑病が多くの生産者で多発しています。8月の日照が少なく根の活力が低下したことで蔓延したものと思われます。8月中旬の気温が低く推移していることから、うどんこ病の発病開始が早くなるおそれがあり、注意が必要です。また、現在は、ハダニ類の発生が少ないですが、7月に多発していたこともあり注意してください。

【気象の経過】（図1）

6～7月の降水量は平年より少なく推移し、7月15日に梅雨明けしました。しかし、8月になると降水量が平年より多くなり、8月11～14日に大雨があり8月中旬の降水量は879mmとなりました。また、8月中旬には日照時間が少なく、平均気温は平年より約4℃低く推移しました。

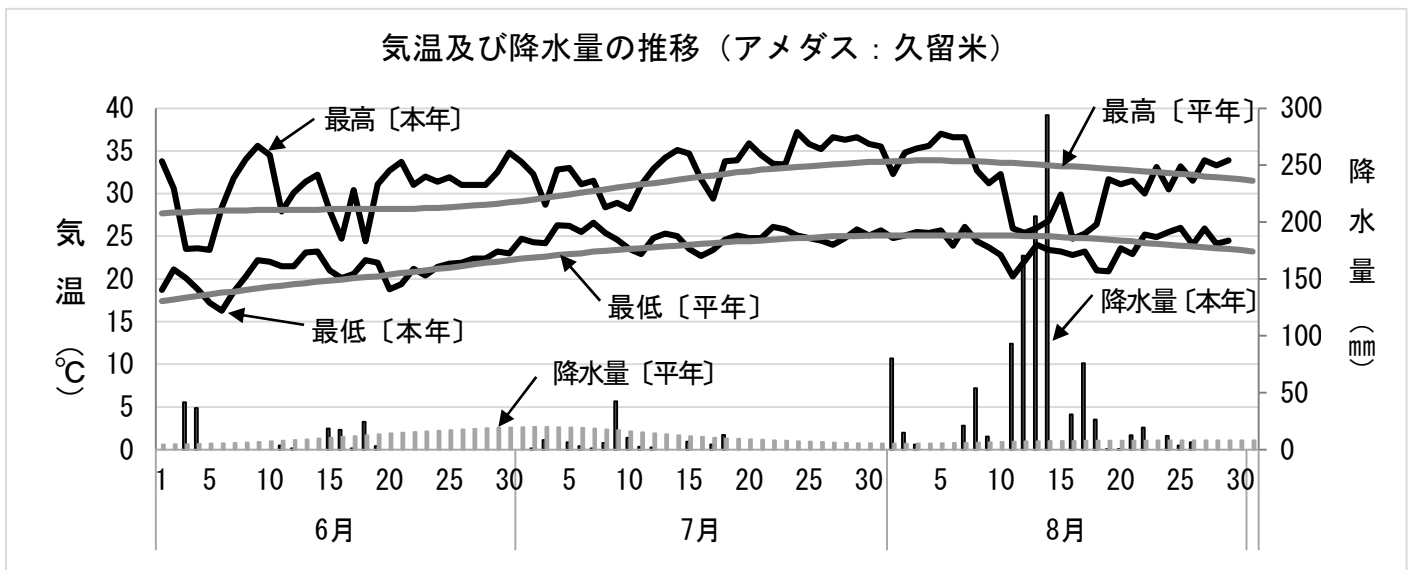


図1 6～8月の気象の推移

【今後の気象予報及び生育の見込み】

[九州北部地方の1か月予報] (8月26日 福岡管区気象台発表)

向こう1か月の気温は、ほぼ平年並の見込みでしょう。

向こう1か月の日照時間と降水量はほぼ平年並みの見込みです

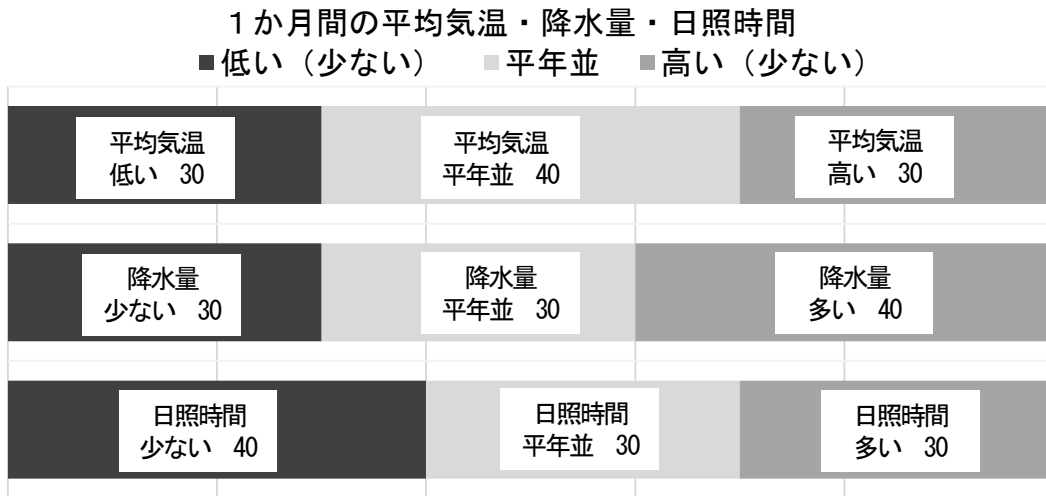


図2 向こう1か月天候の見通し(九州北部地方)

週別の天候・平均気温

	(1週目) 8/28~9/3	(2週目) 9/4~10	(3~4週目) 9/11~24
天候	平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わりますが、前線や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。	天気は数日の周期で変わるでしょう。
平均気温	平年並 の見込み	平年並 の見込み	ほぼ平年並 の見込み

[生育の見込み] 9月前半の気温が平年並みで推移すると見込まれることから、普通ポットの花芽分化は例年と同じころと思われます。しかし、9月が高温になることもあるので、注意が必要です。

9月の管理目標

- ・必ず花芽分化を確認して定植する。
- ・定植後には1日に2~3回かん水して、活着を促進する。
- ・早期作型では、かん水制限や寒冷紗被覆により目標とする時期に2番花房を分化させる。
- ・定植後から病害虫防除に努め、本田でのうどんこ病、炭そ病、ハダニ類の多発を防止する。

育苗管理（普通ポット）

- 窒素が切れすぎると1番花房が分化しにくくなり、また早進株が多くなるので、最終追肥後、体内窒素(硝酸イオン)が50~100ppmを下回る場合には、窒素を含む液肥を葉面散布する(例:OKF-1 1,000倍、メリット青500倍等)。(極端に切れている場合には、OKF-1 1,000倍、キッポ青500倍等をかん注する)
- 9月の高温は花芽分化を遅らせることになるので、必ず寒冷紗を被覆する。

ほ場準備

- ほ場全体が十分に乾燥した後、トラクターにより耕起し、畝たてする。(半乾きの状態で耕起すると、生育不良の原因となるため、ほ場が適湿状態になるまで待つ)
- 太陽熱消毒や薬剤消毒を行っていないところでは、土壤消毒を実施し定植する。

(トピックス参照)

定植

- 早い作型ほど高温時の定植になるので、早期作型では、定植前に寒冷紗を被覆し地温を下げしておく。定植後5~7日間はそのまま寒冷紗被覆を続け、活着促進・根傷み防止を図る。苗が活着したら、株づくりのために寒冷紗を除去する。
- 普通作型では、定植後の寒冷紗被覆は行わない。
- 条間は55cmを目安にし、狭くならないように注意する。
- 株間は、土耕栽培で25cm、高設栽培で20~23cmを目安にする。
- 定植前には必ず花芽検鏡を行い、最適な花芽分化ステージ(表1)になってから定植する。早い花芽分化ステージでの定植は、生育が旺盛になり出蕾の不揃いや乱形果の発生及び2番花房の分化の遅れの原因となる。特に、早期作型では厳守する。
- 深植えは、生育不良になりやすいため注意する。

表1 定植日と花芽分化ステージの目安

定植日	花芽分化ステージ
9月10~14日	分化~ガク片形成
9月15~18日	分化~ガク片形成
9月19~22日	分化
9月23日~	肥厚後期

定植後から2番花房対策までの管理

◎早期作型

生育が旺盛になりやすく、2番花房の分化が遅れやすいので、次の対策をとる。

● 寒冷紗被覆

2番花房分化対策のため、9月25日以降から寒冷紗を再被覆する。

寒冷紗被覆期間の目安:9月25日以降から2番花房分化確認まで

表2. 寒冷紗の種類と遮光率

種類	遮光率
シルバー寒冷紗109番	39%程度
黒寒冷紗600番	51%程度
黒寒冷紗610番	58%程度

- かん水

2番花房対策に向けて徐々にかん水量を減らす（図3）

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。（1日に2～3回）
活着後は、かん水を控えるが、控えすぎると生育が遅れ、収量が低下するので注意する。

- その他

マルチ被覆後は、地温抑制のためマルチの裾を畝の肩まで上げておく。

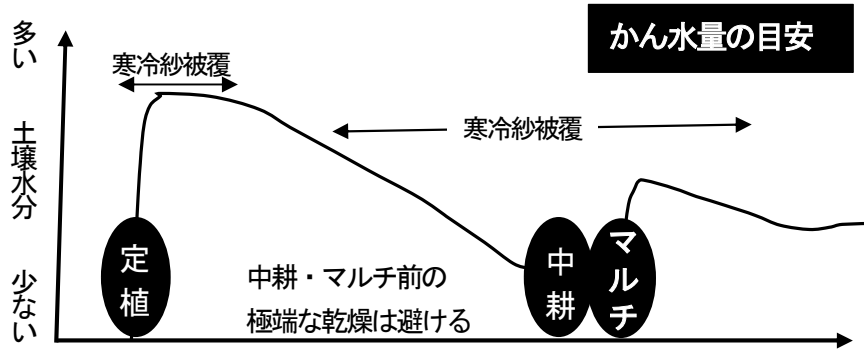


図3 定植後のかん水管理（早期作型）

◎普通作型（2番花房が続きやすい）

充分なかん水等により生育促進に努め、2番花房対策は行わない

定植直後から活着までは畝が乾かないように充分かん水を行う。（1日に2～3回）

活着後はかん水制限や寒冷紗被覆による生育制限は行わない。

活着不良などで生育が悪い場合、液肥のかん注・葉面散布での施肥やマルチ・ビニル被覆時期を早めることなどで生育促進に努める。

葉かぎ

葉かぎは、定植後20日以上たってから開始する。

病虫害防除

害虫は発生初期の防除、病害は発生前の予防散布を行う。

定植後の薬剤散布は、苗が活着してから始める。

【炭そ病】【疫病】

- 8月は雨が多かったので本田で多発のおそれがある。
- 発病した苗は育苗床から除去し、周辺の苗も罹病の可能性があるので、絶対に定植しない。
- 定期的な予防散布を徹底する。
- 定植後に発病株を確認した場合は速やかに除去し、予備苗による植え替えを行う。
- 定植後に炭疽病が多発した場合には、できるだけ遅くビニルを被覆する。または、サイドの閉めこみを遅くする。
- 育苗期に炭そ病、疫病が多発したところでは、育苗株を親株とせず、無病の苗に更新する。また、親株床も更新する。

【うどんこ病】

- 8月中旬の気温が低く推移したので、本田での発病開始が早くなるおそれがある。
- マルチ前後からビニル被覆後まで、定期的に予防散布を行う。
- 軟弱徒長気味に生育すると発病・拡大しやすくなる。寒冷紗を被覆した場合は、軟弱徒長しやすくなるため特に注意する。

【ハダニ類】

- 高温（25～30℃）ほど増殖力が高く、葉数が多くなれば薬剤がかかりにくくなるため、定植後の下葉除去後及びマルチ被覆直後は、しっかりと防除する。
- 葉裏に薬液が付着するよう十分な薬液量を散布する。
- 天敵のチリカブリダニやミヤコカブリダニを使用する場合は、天敵に対して影響が長い農薬の使用を避ける。

【ハスモンヨトウ】

- 防除効果を高めるために速効性の薬剤と遅効性の薬剤をローテーション散布する。
- 中老齢幼虫になると薬剤の防除効果が低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫（卵がかえって7日間程度、体長 1.5cm くらいまで）のうちに防除を徹底する。
- ほ場内や周辺の雑草はハスモンヨトウの増殖の場となるので除草を徹底する。

【アブラムシ類】

- 近年、アブラムシの被害が増えているので、発生初期からの防除を徹底する。
- ほ場周辺の雑草を除去する。

台風対策

（各対策は作業者の安全を十分に確認しながら行うこと）

（1）事前対策

- 1) 施設周囲の作溝により、施設内への雨水の浸入を防ぐ。
- 2) 育苗床やハウス周囲の飛散物を撤去する。
- 3) 加温機の煙突を片づけ、また、オイルタンクの元栓は閉めて、本体が倒伏しないように十分固定する。
- 4) 遮光のため寒冷紗を設置しているところでは取り外す。
- 5) かん水チューブ等は取り外し片づけておく。また、頭上かん水施設は取り外すか、マイカ線等で固定する。
- 6) 定植前の苗は、コンテナに入れて安全なところに移動するか、寒冷紗等で被覆し四方を押さえる。
- 7) 定植準備が終了しているほ場では、地表面の被覆ビニルが飛ばされないよう固定する。

（2）事後対策

- 1) 冠水や浸水したほ場は速やかに排水する。
- 2) 茎葉に付着した泥等は乾かないうちに速やかに真水で洗い落とし、その後、炭そ病等の病害予防のため、農薬使用基準に基づいて、低濃度で殺菌剤を散布する。
- 3) 潮風で作物に付着した塩分は、速やかに十分量の真水で洗い流す。
- 4) 株を被覆していた寒冷紗等は、台風通過後、速やかに除去する。
- 5) 株冷中の苗で、停電が長時間となり冷蔵庫内の温度上昇がみられる場合は、庫外に出す。

- 6) 機器類（加温機、炭酸ガス施用機、ポンプなど）が浸水した場合には使用前に点検する。また、内部が十分乾燥してから電源を入れる。

(3) その他

被害があった場合には、災害に対する補助事業がある場合に備えて写真を撮っておく。なお、写真は被害状況（浸水位置等）や機器類の型式がわかるように撮影する。

トピックス「イチゴの本田が浸水した場合の対策」

－土壤水分が多すぎる状態での耕起は絶対禁物－

8月11日からの大雨により、定植準備を終えた本田が浸・冠水したところが多数あります。また、うね立て前に浸水したところもあります。以前、本田が浸冠水したところでは、土壤が十分乾いてからうね上を7～8cm程度深く耕起してから定植したところでは生育が良好で、土壤が乾いてからうねを立て直したところではさらに生育が良好で通常と同じくらいの収量が得られました。

このような事例を参考にして、本田が浸冠水したところでは、次のような対策をとってください。

なお、作業に当たっては、土壤水分には十分注意が必要です。**耕起に適した土壤水分は〔耕起した後、土を手で軽く握ると固まるが、はなすと崩れるくらい〕**です。土壤水分がこれより多い状態で耕起すると土塊が大きくなり、活着及び生育が著しく悪くなり、収量低下につながります。

- 1 うね立て後、本田が浸冠水したところ
 - (1) 降雨のおそれがなくなってから、うねを覆っているビニルを取り除き、土壤の乾燥を促す。このとき、本田内を踏み固めないように注意する。
 - (2) 8月下旬～9月上旬は雨が降りやすいので、雨が降る場合には、古ビニル等で天井を覆い、雨除けするとよい。
 - (3) うねの土が固くしまっているおそれがあるので、土壤が十分乾燥してから、うねの上部を管理機等で耕起し、土をほぐした後、再び、うねを整える。
 - (4) うねの土が通路に流れ出ている場合には、管理機等で通路の土をうね上に上げた後、(3)の作業を行う。
- 2 これからうね立てをすところ、またはうねを立て直すところ
土が十分乾いてから作業する。
- 3 施肥
 - (1) 既に基肥を施用したところでは、肥料を追加しない。
 - (2) 肥料の流亡が心配されるところでは、マルチ被覆前に土壤の肥料分を調べて、追肥の量を調整する。

4 土壌消毒

- (1) 太陽熱消毒や薬剤消毒を未実施のところでは薬剤消毒を実施する。
- (2) クロルピクリン錠剤で土壌消毒する場合にはつぎのことに注意する。
 - 1) 土壌ができるだけ乾いた状態で処理すること。最大土壌水分量は、耕起した後、地中5～10cmの土を手で軽く握ってはなすと2～3個に崩れるくらい。これより、水分が多い状態で処理すると効果が上がりにくいだけでなく、処理中に臭気を感じやすくなる。
 - 2) 処理はイチゴ定植の15日以上前に行うこと。処理時の土壌水分に注意し、(1)に示した土壌水分より多い場合には、土壌が乾燥するまで処理を遅らせる。
 - 3) 石灰質資材は、クロルピクリン処理の10日以上前に施用すること。
 - 4) 基肥は2割程度減肥する(窒素分)
 - 5) 一度開封した錠剤はその日の内に使い切る。
 - 6) クロルピクリンの燻蒸期間は9月前半(地温25～30℃)で10日程度、ただし、処理期間に曇雨天が続いた場合には(地温15～25℃)15日程度必要である。
 - 7) クロルピクリン処理中にガスが漏れると人や周辺の作物(ウリ類及びカンキツ類には特に注意)に被害が及ぶので、ガスが漏れないように被覆ビニルの周辺を念入りに押さえておくとともにビニルに破れがあれば処理前に補修しておく。
 - 8) 処理10日後に被覆ビニルをはぐってみてクロルピクリンの臭いがしなければイチゴの定植が可能である。においがした場合には、そのまま臭いがしなくなるまで被覆しておき臭いがしなくなってから定植する。

[本資料中の農薬情報は令和3年8月25日の登録内容に基づいています]

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～

”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう!